

学校法人ノートルダム清心学園理事長

渡辺 和子さんに聞く

聞き手 山岡 三子 ●フリーアナウンサー、名古屋短期大学客員教授

学問をひけらかすことなく

学生が読んで納得できる文章を書きたい

山岡 本日は、学校法人ノートルダム清心学園の理事長でいらつしやる渡辺和子先生にお話をうかがいます。

渡辺先生は一九六二年にノートルダム清心女子大学の教授、そして翌年に学長にご就任され、これまで半世紀以上にわたって同大学の教育に携わってこられました。岡山県文化賞、山陽新聞賞、三木記念賞など、多くの賞も受賞なさっています。

さらに、二〇一二年に出版された『置かれた場所で咲きなさい』は、現在までに一五〇万部を突破。ご自身の体験に基づいた、渡辺さんの愛情あふれる言葉は、多くの人の心を打ちました。

渡辺 実はあの本は、出版社からぜひ書いてほしいと何度か依頼があつて、ずっとお断りしていたのですが、どうしてもおつしやるので、これまで書きためていた文章をお渡ししたもので、書き下ろしではないのですよ。

山岡 書き下ろしではないにしても、や

はり折に触れて文章を書きためておられたのですね。

渡辺 個人的に書いたものはほとんどありません。多くが依頼を受けて書いた原稿で、しかもせっけつは詰まっていりぎりりて書いたものばかりです。

私はもともと文章を書くのは好きではありません。ただ、責任ある立場に就いてからというもの、文章で自分の考えを伝える必要が出てきましたので、大学の学報などに寄稿していたことから、それらを編集していただいたのです。

山岡 私も読ませていただき、とても感銘を受けました。言葉の一つ一つが胸にしみこんでくる感じを受けました。

渡辺 私は元来、かたい内容のものは書きません。何と言いましようか、私自身にそれだけの力がないということはもちろんですが、学問をひけらかすという発想がないのです。つねづね、学生が読んでわかるような、納得できるものを書きたいと思っていたので、そうした点も評価いただいたのかもしれない。

でも、こんなに反響があるとは思っても



渡辺 和子さん（右）と山岡 三子さん（2015年1月27日 ノートルダム清心女子大学にて）

りませんでした。一万部売れたらすごいと思っていましたのに、あれよあれよという間にあんなに売れてしまつて。自分でも驚いています。

「負けず嫌い」の性格で乗り越えた 英語の壁、学生自治会長の重責

山岡 これまでのキャリアについてお聞きしていきたいと思います。渡辺先生は、新制の聖心女子大学の一期生でいらつしやいますね。

渡辺 はい。その前に、聖心の国語科を卒業しています。戦後間もない時期でしたから、まだ大学ではなく、聖心女子学院高等専門学校と言っていた時代です。

しかし、戦争が終わつて、母が私にこうアドバイスしてくれました。「あなたは国語科を出たけれども、これからの時代は英語が必要になるのではないかしら」と。

そこで、聖心の英語科に入り直したのです。一九四七年のことでした。まだそのころも専門学校でしたが、一年後の一九四八年に新制の女子大学が設立されることになつて、聖心も新たに聖心女子大学として生

まれ変わりました。

私どもは専門学校の一年生でしたが、横滑りで、新制大学の二年生になることができ、私どもの学年が聖心女子大学の一期生ということになります。

一期生は三〇名ほどだったでしょうか。

私は一度、国語科を出ていますから、皆さんよりも年齢がいくつか上であるにもかかわらず、英語をうまく話すことができない一方で、およそ三分の一が帰国子女でしたので、当初は英語で大変苦労し、惨めな思いもしたものです。さらに、聖心に初めて学生自治会がつくられることになり、私が初代の会長に選ばれることになり、学生たちの会合でも英語を使わなければいけませんでしたので、四苦八苦していました。

しかも、ときおり学生自治会の様子を見にこられる学長のマザー・ブリットは、決して日本語をお話しにならないシスターでしたので、私としても気を張りっぱなしという状態でした。負けず嫌いだった私は懸命に勉強したものです。

山岡 在学中は、学業とともに、アルバイトにも励まれたようですね。

渡辺 戦後、私ども旧軍人の家族は、恩

給や扶助料の支給が廃止され、経済的に大変苦しい状態に置かれました。また、私のすぐ上の兄が医学の道を志して医学部に進学することになりましたが、兄は医師になるための勉強に忙しく、アルバイトをする時間がありません。私は自分自身の学費だけでなく、兄の学費も賄う必要に迫られました。

山岡 どのようなアルバイトをされたのですか。

渡辺 私は雙葉高等女学校で、中学校高校生活を過ごしました。雙葉の校舎のすぐ前に上智大学があり、その上智大学にアルバイトのあてはないかとうかがったのです。

私は、一八歳のときに雙葉で洗礼を受けておりましたから、そんな私に何かお仕事をあてがっていただけるのではという淡い期待もございました。

私の問い合わせにに応じてくださったのが、神様のお計らいなのか、いたずらなのかわかりませんが、ミラー神父というお方でした。ミラー神父は、聖心女子大学に学生自治会を設ける際にいらっしゃって、私たち

にいろいろなご助言を与えてくれました。

その際に、私はお部屋をご案内したりしていたものだから、神父様は私をよく覚えていてくださいました。

神父様は、今度、上智大学において、日本で働くアメリカの軍人やその家族を対象にした夜学の国際学部を新設すること、自分はその学部長に就任すること、そして新たに教務の仕事をする人が必要になっていくことなどをお話しになりました。

そうして、私が上智大学の国際学部でアルバイトをさせていただくことを認めてくださったのです。

キャリアウーマンとして

上智大学で教務と財務を颯爽と

山岡 聖心女子大学を卒業後、あらためて上智大学に勤務されたのでしたね。

渡辺 神父様から、卒業しても国際学部で働いてほしいとのことでしたので、あらためて上智大学の国際学部に就職、お仕事を続けさせていただくことになりました。

その後、神父様は財務部長に就任されたので、私は教務と財務を担当することにな

り、この時期はまさにキャリアウーマンとして、颯爽と仕事をしていました。

やがて、上智大学が男女共学になり、女子学生の入学が許された際に、神父様から「あなたが第一号になりなさい」とのお話をいただき、大学院の西洋文化研究科に進学し、修士号もとりました。

山岡 女性の活躍という意味では、本当に先駆者でいらっしやいますね。渡辺先生が修道女会に入会されたのには、どういう理由がありだったのでしょうか。

渡辺 上智大学で充実した日々を過ごしていたのですが、私も気がつけば二九歳になっていました。兄も医師の免許をとっていましたし、私自身も今後のキャリアについて考える必要がありました。

というのも、修道院に入るには、三〇歳までという年齢の制限がありました。そこで、神父様にご相談申し上げたところ、一八歳で洗礼を受けて、一年たっているし、そろそろ修道院に入ったらどうかとおっしゃっていただきました。そして、神父様の勧めに応じて、ナミュール・ノートルダム修道女会に入会したのです。

この修道女会はベルギーに端を発して、アメリカで多くの学校を経営している修道女会でした。私の性格を考えると、ヨーロッパよりもアメリカのほうがいいだろうとの判断からです。神父様方は、私の将来を十分に考えてくださっていたようでした。

山岡 入会直後、アメリカに行かれたのでしたね。

渡辺 修道女会は、すべて命令で動く世界です。母はすでに七〇歳を超えておりましたから後ろ髪を引かれる思いでしたが、命令ですから否も応ありません。

ボストン郊外の広大な修練院で一年間にわたり、修行することになりました。

朝五時に起きて、掃除や草とり、洗濯、食事の下ごしらえなどを行うかたわら、厳格な規律のもとに祈りや黙想、食事などを繰り返す。ある意味単純な日々でしたが、ものごとの一つ一つに、丁寧に心を込めて向き合う大切さを教わりました。

そして、約束の一年が過ぎ、日本に帰って母に顔を見せられると喜んだのもつかの間、修道会から次なる指令が下りました。今度は教育学で学位を取得しなさいという

命令です。これまで勉強していたものとは畑違いの分野で、全く知識がない中での挑戦でした。

苦しい思いもしました。負けず嫌いという生来の気質が最終的にものをいったのでしよう。三年で博士号を取得し、一九六三年、三五歳で日本に戻ってきました。

縁もゆかりもない岡山への派遣命令 三六歳の「くれない族」の学長

山岡 日本に帰国後も、しばらく落ち着かない生活を送られたとか。

渡辺 東京の修練院に戻った直後に下された次の命令が、岡山への派遣でした。ノートルダム清心女子大学の教授に就任することになったのです。私は東京生まれの東京育ち。それまで神戸より西に行ったことさえありませんでした。

さらに翌年、二代目の学長でいらした方が急逝され、私に三代目の学長の就任が命じられました。命令とはいえ、このときはやはり私も困惑しました。というのも、私はノートルダム卒生でもありませんし、岡山に縁もゆかりもない、いわばよそ者だ

つたからです。

七〇代だった初代、二代目の学長に比べて、私はその半分にも満たない年齢でしたし、加えて私はまだ「終生誓願」さえ立てておらず、大学ではトップでも、修道院では一番下という立場でした。当然、風当たりは極めて強いものでありました。

表だって口には出さずとも、私を軽んずるような態度をとるシスターもいらつしやうて、自信を失いかけてました。結果、こんなに苦労しているにもかかわらず、あいさつしてくれない、理解してくれない、ねぎらってくれないと、「くれない族」になつてしまった自分がいました。

山岡 そうした厳しい状態をいかにして乗り越えられたのですか。

渡辺 上京した際に、元上司だった上智大学のミラー神父に、不平不満を申し上げたことがあります。

神父様は私を慰めるどころか、「あなた自身が変わらなければ、どこへ行つても、何をしても変わらないよ」とすげなくおっしゃいました。くれない族であった私をいさめてくださったのだと思います。

渡辺 和子さん



さらに、その後、あるベルギー人の神父様が、私に一つの短い英語の詩を手渡してくださいました。その冒頭の一行が「置かれたところで咲きなさい」という言葉だったのです。

私にとって、この詩は救いでした。そして、私は変わりました。周囲に、自分からほほえみ、感謝し、お詫びの言葉を言うようになったのです。すると、不思議なことに、だんだんと周囲も明るく、優しくなってきました。

自分の頭で考え、選択し、責任をとる

—「今喜ぶ笑顔」よりも「将来に耐える力」を

山岡 ここからは教育者としての渡辺先

生にスポットを当てたいと思います。先生は著書の中でも、人間教育の重要性を強調されています。

渡辺 近年は、「就活」に役立つための資格取得などが重視されていますが、その前に基本的な人格が備わっていないわけにはいけません。すなわち、自分の頭で考えて、選択をして、責任をとるということです。

私は学生時代は人格をつくる大事な時期だと考えています。ですから、学生たちにもあえて厳しく言います。

みんながしているから私もするというのでは、環境の奴隷にほかなりません。環境の主人になるためには、相手の意見も理解しようと努めながら、自分の意見をしっかりと表明する必要があるのです。

大学の四年間で、さまざまな学び、体験をする中で、それぞれが独自の人格を形成してほしいと願っています。

山岡 それこそがキリスト教に基づいた人間教育でもあるのですね。

渡辺 全くそのとおりです。それと同時に、こうした私の考えの背景には、母の影響もあると思います。私は母から「我慢す

ること」「努力すること」「不自由を忍ぶこと」の三点を繰り返し教わりました。

口答えも一切許さない母でしたから、なんて冷たい人かと思った時期もありました。でも、今の私があるのも母のおかげです。最高の母親に育てられたと思っています。母はこんなことも私たちに話して聞かせてくれたものでした。

「お母さまはね、あなた方がほしいというものを買ってあげることではできるだけでも、今、あなた方が喜ぶ顔は見たくない。将来、どんなつらいことがあっても、それを耐えられる力をつけてあげたい」

私も正直申し上げて、今、学生たちが喜ぶ顔は見たくありません。言葉遣いにして、お行儀にしても、学生たちが社会に出たときに、笑いのものにならないように、しっかりと教育しなければとの思いで、学生たちには厳しく指導しているのです。

山岡 そのことも関連するかもしれませんが、渡辺先生は、とても礼儀を重んじていらつしやいますね。

渡辺 私は、今でも講義を受け持っていますが、授業の始まりと終わりに、必ず

立ってお辞儀をし、させるようにしています。正しいお辞儀ができないときはやり直しを命じることもあります。遅刻して入ってきた学生にも、「今、入ってきた人、立ちなさい」と言って、「何かあいさつはありませんか」とあえて問うようにしています。

本当に基本的なことばかりですが、それができないばかりに、社会に出て苦労するのは学生たちですからおろそかにはできません。これも母の影響かもしれません。

「たくなじい」をゆる「自由」 「きれいさ」と「美しさ」の違いとは

山岡 私が渡辺先生の著書の中で、特に



山岡 ミチさん

感銘を受けたのが、「自由」に対する認識についてでした。私たちはやりたいことをやるのが自由と考えがちです。しかし、我慢する自由もある。そうした自由も忘れてはいけないと強調されていますね。

渡辺 したくないことをする自由。してはいけないことをしない自由。意に反したことでも自ら選ぶ自由があるのです。

学生たちは、玄関で脱いだ靴をそろえずに、そのまま上がつてしまふということがあります。靴をそろえることは面倒くさいのでしょうか。しかし、私はあえて言うのです。面倒だからこそしようと。

それは靴のためでも玄関のためでもありません。理性的に生きることとは、とりもなおさず、学生たちのためなのです。

最近の学生は、お化粧に余念がありません。やはり、「きれい」になりたいんですね。それはわかります。私が訴えたいのは「美しく」なること。その美しさの模範は、マザー・テレサです。

私は来日された際に、彼女の通訳を務めましたので、間近に接したことがあります。マザーのお顔は本当にしわくちやでした。

学生にも言います。マザーは、決してミスコンに出るような容姿の持ち主ではありませんでした。でも、いつまで見つめていても飽きない美しさがあった方です。

マザーは見捨てられた子どもたち、ホームレスの人、重病にかかった人、周囲がまわってくれない人がいたら、すぐに飛んで行って介抱する方です。そうした生き方そのものが、美しさの背景にあるのです。

そのようなことを話すことによって初めて、学生たちは「きれいさ」と「美しさ」の違いに気づいていきます。

山岡 マザー・テレサの「愛」そのものがお顔に表れているのですね。

渡辺 人間は一人では生きていきません。周囲の人の支えがあるから生きていける。だから「愛」が必要なのです。

では、愛とは何でしょうか。学生は「恋愛」のことばかり考えがちです。そうではないということも強調します。

一五四九年、フランシスコ・ザビエルが初めて日本にキリスト教をもたらしたころの辞書を見ると、「愛」という項目に、ローマ字で「GOTTAI XET」（ご大切）

と書かれています。愛というのは相手を本当に大切に思うことだと説いています。

山岡 そうしたことを直接、学生たちにもお話しなさるのですね。

渡辺 授業でもそうですし、個人的に話すこともあります。

ときに理事長室に相談に訪れる学生もいます。中には「お付き合いしている男友だちのことが気になって、シスターの授業に集中できませんでした。その男友だちが、どうも私でない女性にメールをしているようなんです」といった相談を受けることもあります。

「今どきの学生は臆面もなく……」と想ってしまふこともあります。私は、若い彼女らの素朴な悩みに耳を傾けたり、アドバイスをしたりすることがとても好きです。

愛、本当のぬくもり、

そしてGOTAI-XET(ご大切)

山岡 授業が終わるたびに、学生から感想なども受け付けていらつしやるとお聞きしています。

渡辺 出欠の確認も兼ねて、学生たちに



を私に明かしてくれます。

以前はすべてに返事を書いていました。今はそこまでの気力、そして体力がありません。でも、ひととおりメモに目を通して、これは返事が必要だなと思つたものは、時間之余裕があるときに書くようにしています。そして、書いたものを次の授業のときに返します。こういうことは一切、人任せにしません。

山岡 学生の皆さんも直接お返事をもらえるとうれしいでしょうね。

渡辺 とても喜んでくれます。ぱつと笑

はメモを書いてもらっています。

感想や質問などがあれば、何を書いてもいいですよと伝えていきます。多くの学生がいろいろなと、胸の内

顔になるんですよ。私たちが学生だった時代に比べても、あんなに喜ばなかったと思います。今、人の絆がことのほか強調されていますが、本当のぬくもりが足りないのではないかと案じることもあります。

「一生の宝物にします」とまで言ってくれる学生もいます。そのように言われると、もつときれいに書いておくべきだったかなと思います(笑)。

そうしたメモだけでなく、お手紙をいただくこともあるのですよ。

山岡 学生からお手紙をもらう気持ちはいかがですか。

渡辺 やはりうれしいものです。先日もある学生から心がもつた手紙をもらいました。その学生は、塾の講師のアルバイトをしているようで、なかなか生徒の成績が上がないことに悩んでいました。そのことを以前に例のメモに書いてきたので、私が「ときには褒めることも必要ですよ」と返事を返したことがありました。

学生は私のアドバイスを参考に、たくさん褒めて、ときには厳しくしかつて、一所懸命指導したようです。すると、その生徒

はみごと試験に合格。その知らせを聞いた学生は、大変うれしかったのでしよう。私へのお礼も兼ねて、手紙をくれました。

手紙には、コッコツがんばってきた生徒の努力が報われて、本当によかったと書いてありました。その学生は、今回の経験を大切に、就職活動がんばりたいとも記してくれていました。

これがあるから、教師というのはやめられません。直接、その学生と言葉を交わしたことはありませんが、また返事を書くかと思っています。

山岡 すばらしい交流ですね。まさに学生の皆さんと強い信頼感で結ばれていることがわかります。渡辺先生の人格教育の成果が、今のお手紙に集約されているように感じました。

ようやくたどり着いた「自己受容」

山岡 それでは最後に、今後力を入れたこと、なさってみたいことなどがございましたら、お聞かせください。

渡辺 そんなこと、八八歳の人間にお聞

きになるんですか。

もう楽隠居をさせていたいただきたいのもやまやまですが、修道者となった以上、そういうわけにもいきません。これからも、学生たちと今までどおりの気持ちで接していきたいですね。年齢もありますから、今以上のことはできないでしょうが。

山岡さんはすらっとしていて美人ですね。誰も言うてくれないから自分で言うてしまいますが、私もけっこう、すらっとしていて、ハイヒールが似合う美人だったんですよ（笑）。アメリカに赴任した当時、学生たちは「きれいな日本人のシスターが来た」ととても喜んでくれたものです。

年齢を重ねるにつれて、以前は容易にできていたことができなくなり、老いも感じるようになりました。さらに膠原病を患い、その治療薬の副作用で骨粗鬆症になったため、背が一四センチも縮んでしまい、背中も丸くなってしまいました。

修道者がこんなことを言うては情けないのですが、昔はガラスに映った自分の姿を見ていつこうに平気だった私も、老いが深まるにつれて、「こんな自分の姿は見た

くない」と思ったこともありました。

でも、あるとき気づいたのです。今の私のような気持ちは、実は多くの方がもっているものではないかと。自分の容姿、偏差値、出身校。何か自分に負い目を感じ、悩みを抱えている人は少なくないと言います。私はこれまで「自己受容」の大切さを繰り返し、学生たちに説いてきました。まさに、自ら実践しなければいけない立場に立たされている気分です。

本当は今でも、学生たちには「うちのシスターはきれいなよ」と言ってもらいたい気持ちにはあります。でも、私は今の自分を受け入れられるようになった。自己受容ができたことも率直に学生に話すのです。すると、学生がメモにこんなことを書いてくれました。「私も背が低いですが、でも低いかからこそ見えるものもあります」。そういう形で学生が受け止めてくれたことに、私は喜びを感じます。

やがて、学生たちも年をとるでしょう。そのときに「シスターはあんなことを言っていたな」と思い出してくれたらと、今、しみじみと感じているところです。